

「了解は説明をそのうちに含む。その逆はない」。

かつて、Karl Jaspers の呪縛をこれほどまでにあっさり、しかも完膚なきまでに解きほだした精神科医がいた。しかしそのことを知る者は少ない。

安永 浩の方法論の原点は、学生時代まで遡る。当時ほとんど無名の哲学者であった Wauchope の著書 “Deviation into Sense” (邦訳『ものの考え方』) に接したときの感動を、安永は次のように回想している。

当時の私として、先ず得られたのは一種の「解放感」でした。そこには「論理」というものの効用と限界とが明瞭に示されていました。同時に彼は、「自分から出発せよ」ということを力強く激励してくれていました。「そうしさえすればすべての“もの”の言い方は矛盾無くそろえることができる…… あと細かいところは大いに「論理」を用い、具体的に工夫すればよいのだ……」と言うのであります。

講演録「O.S. ウォーコップの次世代への寄与」

明治以来、Kraepelin を礎としてきた日本の精神医学が、敗戦とともに米国文化（精神分析）に侵食されるのを恐れた東大教授 内村祐之は、あらたに Jaspers をもってそれに対峙せしめた。筆者が精神医学の道に進んだ頃も、Jaspers はまだ絶大な影響力をもっており、『精神病理学総論』は必読書のなかでも最も重要なものとされていた。

Jaspers の「了解」と「説明」は、精神科医を志す以上、一度はその洗礼を受けざるをえないものだったのかもしれない。しかし結果的には、〈精神〉と〈身体〉、〈心〉と〈からだ〉という二元論の桎梏を解消するどころか、より尖鋭なものとするものだったように思われる。一方では、自然科学者が偽善に身をやつしながら患者の人格を無視し、他方では、精神主義者が鼻持ちならぬ増上慢に陥り、そして双方が自らの問題を差し置いたまま、相手を指弾するという不毛な対立が、長らく精神医学界を混乱させてきた。本来、二つの立場は矛盾なく両立するはずであるにもかかわらず、こうしたトラップにやすやすとはまり込んでいることに対して、安永は本論のなかで珍しく怒りを露わにしている。

ところでこの二項対立は、若き日の安永自身の苦しみでもあった。彼は、自らをシゾチーム（分裂気質）と自任している。その彼自身によるシゾチームとは、対象との心的距離を大きく遠間にとる（とらざるをえない）意識構造を特徴とする。それゆえ距離を持った対象認識（客観）と、現実離れした幻想（主観）の分裂に苦しむ。周囲への違和感につきまとわれやすくとともに、その距離を一挙に突破して無に帰せしめたいという満たされぬ衝動を強烈に潜ませている。

その苦悩を癒したのが Wauchope であった。前出の引用に引き続いて、安永は次のように述懐している。「私はいささか神経質、また強迫的、とも評されてよいような青年で

したから、その解放感はかなりのものでした。私はそれ以後医者になるまで、“哲学の病”にもう陥ることなく、より明朗になり、学び、かつ働き、……つまりより健全な青年期後半を送ることができたように思います」。 (同前)

それゆえこの論考は、認識の病いから快癒した経験をもつ安永の、当時の精神医学の現況に対する処方箋である。基本的な考え方は冒頭にごく簡潔に書かれている。数ある論文のなかで、一番わかりやすい。そこをクリアできさえすれば、あとはゆっくりと、彼の奏でる自在な変奏に身を任せればよい。できないときは、記述(6.)、現象学(7.,8.)、夢(10.)、精神分析(11.)など、自分がとっつきやすい題材から読んでみるとよいだろう。

もちろん残された問題もある。私から出発するとして、ではそれぞれの私の観点が複数存在することに対してはどうすればよいのだろうか。あるいは、了解は説明を完全に包摂することができるのだろうか。なにか了解を超える構造が、了解を支えているのではないだろうか。だがこれらはわれわれの世代が答えるべきものである。

日本から遅れること数十年後に、アメリカ精神医学は、精神分析からヨーロッパの伝統的精神医学に舵を切った。いわゆる DSM-III (1980) の登場である。しかしここでは、Kraepelin も Jaspers も Schneider も、驚くほど粗雑に取り扱われている。同じアングロサクソン系の言語という条件があるにもかかわらず、彼らはいったい何を学び、そして何を付け加えたのだろうか。

ベルリンの壁が崩れた頃、日本の精神医学界の混乱の震源地であった東京大学でも、いわゆる正常化が達成された。しかし、現在の精神医学は二項対立を乗り越えたといえるだろうか。決してそうではないだろう。この安永の論考は、われわれが常に立ち返るべき原点であると思う。

(内海 健)